

茨 苑

第17号
2010.9



H22. 7. 24 水戸オープンキャンパス 来校者に資料を手渡す池田学長

もくじ

巻頭言	1
国立大学法人茨城大学の新役員の体制について	2
シリーズ「地域社会と私」	3
シリーズ「我が社の社会連携」	4
シリーズ「同窓生サロン：山あり海あり 河あり野あり」	5
阿見町と茨城大学との連携に関する定期協議会	6
平成22年度学生地域参画プロジェクトの採択プロジェクトが決定	7
「茨城県北ジオパーク」本格的活動を開始！	8
茨城大学での研修を終えて	9
首都圏北部4大学発「新技術説明会」開催報告	10
第2回日中韓医学会合同シンポジウムおよび第111回日本医史学会学術大会	11
日立キャンパスにて「こうがく祭+オープンキャンパス」が開催されました	12
茨城大学図書館が企画展「茨城初の女性教師 黒澤止幾子」を開催	13
あみプレミアムアウトレットへの食材供給を開始	14
農学部で撮影 TVドラマ「もやしもん」	15
シリーズ学生コーナー「茨城大学われらこそぞれり」	16
シリーズ「奨学金を受給して」	18
キャンパス風景	19
ひたち環境都市フェスタ2010に参加	20
「わかりやすく伝えることの難しさ」を感じつつ	21
全国同時七夕講演会サイエンスカフェ 宇宙の天気を予報しよう	22
テレビ・コマーシャルの考古学	23
「愛と傷つきやすさと被害者学の第1回共同セミナー」の開催について	24
水戸黄門まつり・市民カーニバル in MITOに参加	25
第5回「茨城大学社会連携事業会基盤強化委員会」を開催しました。	26
第7回「茨城大学社会連携事業会理事会」を開催しました。	28
平成21年度 社会連携事業会収支決算報告について	29
平成22年度の事業方針及び主な事業等について	30
募金等の状況	31
広告を募集します	33
事務局からのお便り・編集後記	34
茨城大学社会連携事業会人会案内	35

地域資源としての常陸大宮市 「おがわふれあいの森」

茨城大学理学部長 堀 良 通



常陸大宮市緒川地区に120haほどの森林があります。森林は薪炭林として利用されていた萌芽林、スギ植林地、尾根部のアカマツ林、耕作放棄地などから構成されています。バブル期のゴルフ場予定地が利用されず、産廃用地として計画された土地を旧緒川村が買い取った森林です。合併後の常陸大宮市はこの森林を「おがわふれあいの森」と名付け、地域活性化の森林として生き返らすために、幾つかの取り組みを行ってきました。代表的なものが、常陸大宮市の交流都市である東京都豊島区の「豊島区の森」、オカリナ奏者の宗次郎氏がプロデュースした「オカリーナの森」です。

「豊島区の森」には種々の桜の木が植栽されており、都会の人に自然に触れ合う場所を提供しています。「オカリーナの森」にはオカリーナ交流館、野外音楽堂の施設が作られています。小面積ですが「きのこの森」としてきのこ栽培をしている場所もあります。

常陸大宮市と茨城大学は「常陸大宮市森を活かしたまちづくり協議会」（会長、齋藤典生 人文学部教授）をつくり2006年10月より両者で共同研究を進め、2008年11月には「常陸大宮市 森を活かしたまちづくり 提言書」を出しています。私たちは「おがわふれあいの森」の植生を衛星画像データと現地調査から調べました。典型的な里山の特徴を持ち、全体の面積の69.0%がコナラ林、残りがスギ林26.7%、アカマツ林1.0%、アラカシ林0.6%です。アカマツは松枯れ病でかなり枯れましたが、尾根部には立派なアカマツが少し残っています。スギ林は間引き枝打ちをしている管理された林と放置された森林の両方があり、教育的に比較できる良い場所になっています。私たちの研究室では植生調査のほかに、「地形と植物相の関係」「異なる森林間の境界構造の解析」「帰化植物相」「ヤブランの生活史解析」など様々な研究を学生と一緒にしています。植物のほかにも、動物についての様々な研究が別の研究室で行われています。

「おがわふれあいの森」はどこにでもある普通の森林です。1950年代に燃料革命が起こるまでは、萌芽再生で永続的に利用されてきた里山林（薪炭林）です。里山林は中山間地域の過疎高齢化とあいまって各地で放置されています。NPOにより里山再生の運動が各地で行われていますが、放置された里山のごく一部です。環境省は日本の生物多様性の危機の一つとして、里山に生息する動植物をあげています。里山が利用されなくなったために、彼らの生息環境が失われたためです。

「おがわふれあいの森」のような普通にある森林であっても、いろいろな事に活用でき、生物多様性の保全にも寄与できます。私たちは「おがわふれあいの森」を「茨城大の森」として、今後も教育研究の森として有意義に利用させて頂くとともに、地域に活動の成果を還元していきたいと考えています。

国立大学法人茨城大学の新役員の体制について

平素は本学の社会連携活動の事業についてご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

平成22年9月1日付の役員交代により、新しい体制でスタートしました。

今後ともご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



学長
茨城大学社会連携事業会会長

池田 幸雄



理事・副学長（教育担当）
茨城大学社会連携事業会理事

(新) 田代 尚弘



理事・副学長（学術担当）
茨城大学社会連携事業会副会長

(新) 神永 文人



理事・学長補佐（総務・財務担当）
茨城大学社会連携事業会理事

山本 恵一



理事（事業担当）
茨城大学社会連携事業会理事

(新) 影山 俊男



監事
茨城大学社会連携事業会監事

矢口 一美



監事

横山 哲郎

地域社会と私



東海村長 村上達也

地方分権の風

「地域社会」、ここでは茨城県東海村に限定し話を始める。私は1997年より13年間村長を務めている。サラリーマンから村長（政治家）への転身、その動機は「地方分権の風」を感じたからであった。中央集権国家体制の転換、地方分権時代の到来は壮大な歴史ドラマとなるはずのものであった（平成の大合併へ歪曲、矮小化されてしまったが）。就任以来取り組んだのは、地方自治の原点たる住民自治の確立、地域自治体制の再構築、前提となる行政への住民参加、参画の推進であった。一言で表現すれば「東海村に市民社会を」であった。

原子力の村

東海村は「原子力の村」である。原子力発祥の地であり、日本での原子力開発と村の歴史は二重写しである。今では面積37平方kmに原子力科学基礎研究から核燃料廃棄物処分までの13もの原子力関連事業所がある。世界的にもこれ程集積された地域はないそうだ。

村の財政は他所から羨まれるほど豊かである。財政収入の6、7割は原子力と電力からである。また村民生活の原子力への依存度も高く、全世帯の6割近くが原子力関連産業に関係している。

反面、これほど特定業界に依存していると、村政での原子力界の影は絶大である。領主様であれ、大企業であれ圧倒的な存在を抱えた地域の共通点であろうが、原子力界は国を頂点に多くの基幹産業からなる集合体であり、更に大きなスーパーパワーである。

反原子力の烙印

この村で「反原子力」と言われたらお仕舞い。三期目、四期目の村長選で、こともあろうに「反原子力の村長」との烙印を押された。JCO臨界事故後喋

り過ぎて、当局や原子力業界から不興を買ったか。本当のところは、分権を目指す自立志向の強い私の行政が原子力界に警戒されたのだと思っている。思うに原子力推進の政治文化は地方分権と相容れず、分権時代の地域社会とズレが生じてきているのではないか。

原子力界と地域社会の謳い文句は「共存共栄」である。従来原子力界はカネと権力による中央集権的「地域対策」に慣れ親しんできた。そこからの脱皮は容易でない。今や地方主権がいわれる時代となった。原子力界が住民の自治意識への理解を欠くようなことがあれば影響力が大きいだけに地域にとっては不幸である。

真の共存共栄への道

地域社会は経済成長時代の終焉、少子高齢化の急進で根源的な改革を求められている。その解は「自立と自律」つまり中央依存からの自立と自律可能な地域社会の形成である。この達成は住民の自覚と自立精神がなくては不能である。福沢諭吉の「一身独立して一国独立す」である。日本の地域社会も意識的、無意識的にせよ「市民社会」を指向し歩みだしているのである。

原子力界が地域社会との真のパートナーを目指すなら、地域社会の今日的課題に応える必要がある。万が一にも地方の自立を害するが如きことがあってはならない。各人が業界意識や組織目標に捉われた組織人としてではなく、個人、教養人として地域社会の声に耳を貸してみてもどうか。

元の西ドイツ大統領ワイツゼッカー氏は「体制国家であったドイツは戦後40年かけて市民国家になった、それによってはじめて西欧社会に受け容れた」という趣旨のことを言っていた（「歴史の終わりか幕開けか」岩波書店1993）。参考にならないだろうか。

将来を担う次世代の育成に向けて

株式会社 常陽銀行
代表取締役 専務取締役 宮 永 芳 行



当行は、「健全、協創、地域と共に」という経営理念のもと、質の高い総合金融サービスの提供を通してお客様の成長をご支援するとともに、地域社会・地域経済の発展に貢献するために様々な活動に取り組んでおります。具体的には、地域経済社会の発展に向けた取組や常陽藝文センターによる地域の芸術・文化の振興、環境保全に向けた活動などを展開しております（本会報第5号「当行の地域社会貢献への取組」（2006年7月発行）参照）。また、平成7年7月には常陽銀行創立60周年を記念し、郷土の歴史や芸術文化、金融経済に関する資料を収集し、広く公開する目的で常陽史料館を創設いたしました。本稿では、将来の地域社会を担う次世代の育成に向けた取組として、常陽史料館における「金融教室」や茨城県教育委員会との連携による「放課後子ども教室」の支援などを紹介いたします。

常陽史料館には、貨幣や銀行に関する資料を展示する「貨幣ギャラリー」のほか、郷土文化や金融に関する図書資料を公開する「史料ライブラリー」があります。また「アートスポット」では随時各種の企画展を開催しております。来館者数は毎年増加しており、平成21年度には2万人を超える来館者がありました。こうした展示・公開に加え、新たな取組として平成20年9月から地域の教育機関と連携した「金融教室」を開始しており、これまでに小学生から大学生まで数百名が受講しております。講義

内容は学年に応じて様々ですが、貨幣の歴史、銀行の役割、金融の機能などを主体に構成しています。さらに、平成21年度からは、中学・高校・大学生などのインターンシップ（1日職業体験）も受け入れています。

こうした「金融教室」での経験をもとに、平成22年3月に小学生を対象とした金融教育用DVD教材（「お金のはなし」「銀行ってナニ？」）の2本構成）を制作し、茨城県教育委員会に寄贈いたしました。県内全ての「放課後子ども教室」（約300箇所）に配布され、子供たちの勤労観・職業観や社会で生きていく力を育むとともに、地域社会全体の教育力の向上を図る取組として活用されています。そのほかには、児童の安全を確保する観点から、毎年、県内のすべての小学校1年生を対象に、防犯ブザーを寄贈しております。

人口減少社会・高齢化社会において、地域の活性化や持続的な成長を図るためには、次世代を担う人材の育成が何よりも大切なことといえます。特に、わが国経済における国際競争力を強化するためには、金融経済教育のより一層の充実が課題の一つであるといわれております。当行の取組は緒に就いたばかりではありますが、地域の次世代を担う人材の育成に少しでも貢献できるよう、今後とも、関係諸機関や教育現場の皆様との連携やご協力を仰ぎながら、内容の充実に取り組んでまいります。



「和同開珎」（左）と「享保大判金」（右）
（貨幣ギャラリー展示品）

常陽史料館

開館時間 10：00～17：45
入館料 無料
駐車場 10台
休館日 毎週月曜日・年末年始
・8月第2日曜日とその翌々日の火曜日
・12月第1日曜日
〒310-0024 水戸市備前町6番71号
TEL 029 (228) 1781 (代)
FAX 029 (228) 2701



金融教室の風景

農学部キャンパス とくにエントランスガーデンと同窓会館



農学部同窓会長 赤塚 尹巳

昭和63年6月15日に農学部教授会が満場一致で現地整備を決定し、翌日6月16日の評議会で全会一致で現地整備を決定し、農学部再開発計画は全国でも最初で最後の計画となり、平成5年に研究・教育棟などが整備され竣工式を行った。このキャンパス整備は大多数の同窓生の夢であり、この実現は現在の農学部の確固たる教育研究の基盤となっていることは周知の通りである。平成12年には、同窓会館を農学部創立50周年記念事業として計画し、関係企業、教職員、同窓会員のご協力により平成12年11月30日に竣工した。現在、二階は宿泊施設として、一階は会議や懇親会場として有意義に利用されている。平成3年に施設整備を始めてから10年後に殆どの教育、研究施設は整備されたが体育館整備

ができずに学生諸君には大変迷惑をかけてきたが、今年の3月漸く完成し、国際交流会館の設置と共にほぼキャンパス計画も完成に近づいていることは関係各位の御協力の賜と感謝に堪えないところです。

さて、農学部キャンパスは校舎ゾーン、体育居住ゾーン、実験実習ゾーンの三つのゾーンから構成されている。特に校舎ゾーンのシンボリック空間であるエントランスガーデンの中心にシンボルツリーとして古来農業に関係深いコブシの株立ちの巨木、キャンパスツリーとしてはサクラを選び約100種が校舎ゾーンに植えられている。春は桜、秋は紅葉、このキャンパスの前庭には農学部にふさわしい各種の樹木が皆様を待ちうけております。機会がありましたら是非一度お訪ね下さい。



平成5年当時の農学部キャンパス内エントランスガーデン

阿見町と茨城大学との連携に関する定期協議会

茨城大学と阿見町との連携協定に基づく定期協議会（トップ会談）が、平成22年6月25日（金）阿見町役場において開催されました。

阿見町からは、天田町長を始めとして、青山教育長、川村生活産業部長等8名が出席し、本学からは、池田学長、松田理事・副学長、宇野理事、太田農学部長等9名が出席しました。

協議会は、相互の出席者紹介から始まり、最初に、天田阿見町長から、「阿見町には、茨城大学農学部を始め、東京医科大学茨城医療センター、茨城県立医療大学の教育機関があり、更に一般企業の研究機関も数多く立地している。これは、阿見町にとっての大きな特徴であるとともに貴重な財産でもある。このような恵まれた環境を最大限に活かし、よりよい行政サービスが提供できるよう協同の町づくりを推進しているところである。特に、茨城大学には様々な分野で町政にご協力をいただいております、今後ますます連携は重要になってくる。」との挨拶がありました。

続いて、池田学長からは、「本学は地域振興、社会貢献を重要なものと位置づけ、各キャンパスを中心に県内全域を対象として活発な社会貢献活動を行っている。特に、阿見町とは、農学部が中心となって活動を展開しており、バイオ燃料、学校給食を活用した地産地消の推進事業等で成果を上げている。これからは、更に連携関係を強化し、また、企業との連携も深めていきたい。」との挨拶がありました。

引き続き、協議事項に入り連携協力事業については、本学から、平成21年度実施した事業として、学校教育を活用した食教育推進への取り組み、共催によるシンポジウムの開催、共同研究・事業として「首都圏近郊におけるバイオ燃料生産効率の向上と地域農業イノベーションの研究」について報告があり、平成22年度の取り組みとしては、従来の事業の継続と新たに小学校における食農教育事業への協力が報告されました。阿見町からは、農業振興、観光振興、男女共同参画及び地域公共交通における茨城大学との連携について、報告がありました。

続いて、産学連携について、阿見町から、町内の工業団地の企業との技術相談、共同研究についての協力依頼があり、本学からは、産学官連携イノベーション創成機構が中心となって協力していくことが確認されました。

双方は、日頃から緊密な関係もあり、和やかな雰囲気の中で活発な意見交換、質疑応答が行われ、有意義な協議会となりました。

なお、定期協議会終了後、参加者は今年2月に霞ヶ浦湖畔にオープンした予科練平和記念館を見学し、散会となりました。



天田阿見町長（左）と池田学長（右）



定期協議会

平成22年度学生地域参画プロジェクトの採択プロジェクトが決定

本学では社会連携事業会の支援のもと、学生が主体となり地域活性化活動を行う、「学生地域参画プロジェクト」を実施しております。

本プロジェクトは本年度で6年目を迎え、学生の活動内容も年々向上し、学内外で高い評価を受けております。

本年度も、平成22年6月23日（水）に水戸キャンパスにて、採択プロジェクト選定のための、プレゼンテーション及び審査会を開催しました。

採択プロジェクトの選定は、事前に提出された申請書と当日のプレゼンテーションの内容を踏まえて、審査会での審議により決定します。

本年度は14件の申請があった中から、下記のとおり10件のプロジェクトが採択されました。

残念ながら不採択となったプロジェクトもありましたが、どのプロジェクトも熱意ある発表内容で、全体的な質の高さを物語るプレゼンテーションとなりました。また、採択となったプロジェクトは今年度を通して学生の斬新なアイデアとフレッシュさで地域活性化活動を展開していきますのでご注目いただければと思います。

代 表 者		プ ロ ジ ェ ク ト 名	活動分野
所 属	氏 名		
教育学部・3年	斉 藤 栄 司	やってみよう！のんびり授業 ～NPOを結ぶ地域活性化合同プロジェクト～	1, 2, 3, 4
理学部・4年	小 泉 智 弘	生きものひたち紀行 ——常陸の山海に息づく命を見つめて——	1, 3
理学部・2年	後 藤 優 季	ライフセービング普及のためのジュニア教育プロジェクト	1, 2, 4
工学部・4年	滝 沢 惟	女性応援プロジェクト ～がんばれ県北地区の女性たち～	1, 2, 4
大学院理工学 研究科・1年	伊 藤 真 吾	Formula-SAE部の活動を通して、地元企業からの技術伝承 と地域交流	1, 4
理学部・4年	檜 木 梨花子	光害対策プロジェクト「暗い夜空を求めて…」	1, 3, 4
人文学部・3年	小 林 李 紗	こどものアート遊びによる中心市街地活性化プロジェクト	1, 2, 3, 4
人文学部・4年	向 後 春 輝	FLEAIマーケット ～モッタイナイを考える～	2, 4
大学院教育学 研究科・1年	马 恺	I T掲示板による外国語と異文化交流	1, 5
人文学部・4年	中 村 あゆみ	那珂川の環境を考える —ボートを通して那珂川をきれいにしよう	3, 4

[活動分野]

1 教育・研究 2 ボランティア 3 課外活動 4 地域交流 5 国際交流 6 その他

「茨城県北ジオパーク」本格的活動を開始！

— 五浦海岸試行ジオツアーの実施 —

国立大学法人茨城大学・茨城県北ジオパーク推進協議会

茨城大学をはじめとして県北の7市町村が連携して、茨城県北ジオパークの実現に向けて、「茨城県北ジオパーク推進協議会」を設置したのが、今年の2月でした。その後、準備を重ねて来ましたが、いよいよ本格的なジオパーク活動を開始します。

その第一弾が、「五浦海岸試行ジオツアー」（8月30日（月））です。五浦海岸の自然（地質、生物等）と文化・歴史とを関連させて、一般市民が楽しみ、地域振興に役立つツアーについて徹底的に検討する予定です。講師は、地質学、生物学、美術等を専門とする茨城大学教員、参加者は茨城県北ジオパーク運営委員会委員です。岡倉天心はこの五浦になぜアトリエを築いたのかを、自然という観点からあらたに見直してみたいと考えています（写真：海蝕台からみた六角堂）。また、このツアーでは、地域の特産物を食材とし、ジオパークと関連させた弁当（ジオ弁当）にも挑戦します。自然、文化、食の融合した新しい観光旅行開発へのチャレンジです。ツアー終了後は、茨城県北ジオパーク運営委員会による検討会を行い、市民に親しまれるツアーの基本形の作成をめざします。

茨城県北ジオパークでは、今後この検討結果を活かして、一般市民を対象としたジオツアーを少なくとも8回、計画しています。ジオツアーこそが、ジオパーク事業の中心であり、経済的にも文化的にも地域振興の鍵になるものです。なお、本ジオパークのように、大学が中心となって地方自治体と連携してジオパーク事業を推進するのは本邦において初めての試みであり、全国から注目されています。

【茨城県北ジオパーク推進協議会】

○加盟団体

茨城大学、北茨城市、高萩市、常陸太田市、常陸大宮市、ひたちなか市、大子町、東海村、グリーンふるさと振興機構

○役員

会 長：茨城大学学長、副会長：北茨城市長、高萩市長
幹 事：常陸太田市長、ひたちなか市長、大子町長、東海村長
監査役：常陸大宮市長、グリーンふるさと振興機構理事長



海蝕台から六角堂を見ると、別の世界が見えてくる！